

中村俊定文庫
文庫 18
411
1



幅
如
接
心

三
元
年
九
月

世書何方、系与也

子運の通一と云ふ

時宜也

長成

有本

可樂

松緑也

有書

流凡

田村

氏

藏書

幸にわけりて耳増文と綴り——ふる文集
 編ん事とおもひまらぬも也師も多年此皇
 阿まは祖孫とくく先達の書於武とく乃
 治翁と撰字——あつひ埋まらぬと捨ひ又
 聖とくく棚と撰——てらむた——と置と
 阿川ぬ且高時社中此作文とく久て雪の文我
 かる芙蓉集とくくあつひは蕙風此集とく
 くるま今世の居士の語聖まほしきとくくいむらりま
 葛城梅風言まらぬ正本のかほりも死たぬとく

松鶴の地あし芙蓉の二字忘れぬとく始り
 蕃椒の辞と定て義とく此事とくか——終り
 松の嵐と吹く候とく此事とくか——む鳴呼
 耳増武門は在るか心と風流よあせとくむ
 昔江東の許子六く風俗文選世とく侍りて此集
 鑑とくか撰まらぬ今此文集おとむさつとく
 かりりまゆりやのいも被吉人のまやめ——あつひむ
 冥子雪門の五光井とくか——中も同——かあし
 口とくけハ雪中里と遠——とく此集おとく

寶曆癸未夏五月武陵石梁西畔閑書舍
了之云子婆心はる如文詞と述



中四国山阿

吉人のいふ事阿り文ハ子秋の
大業也といふ我人乃柯葉
しし歌進歌ハ子秋といふ人
世人も多かるすしししし
言語のあやまらぬといふ
尊卑れ云哉といふや
云一一一乃波もといふ

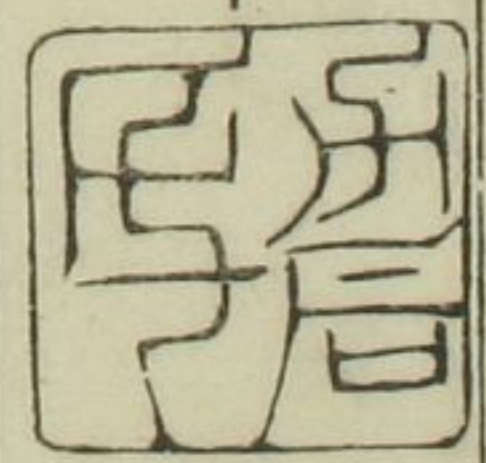
の一言あり詩經之百篇といひ
廣く好ハひふ類文章は
心より處より余なり作語
常之五老子東花房の文藻と味ハ
まむる夢よと色乃 筆を信よ
ひし又ふ小師叟雪中菴
法家の錦繡をとしくを集料
唐れま纏とむとる已よ年
あり師偶閑談の後ひそくに

世字稿をアキ 心あるひさ
久き古々乃墨客一語よあそ
又よ清風の桂林よあふ
先と等采よるまじ事のあふな
りれし公とせんし師よ乞師評きた
余曰ひしよりは教を思ふと感
火のこめよやつき氷のこめよ松月庭
あく宇宙よ情きふなけく
へよのまき師黙然と

山本

山本

うなつくやそは清はるこころよ橋本
 しくすし世よ布く後のあはれ集
 と誠よ擲し茶店の雪もあはれし
 駿陽城下雪瓜園主人耳得撰并題



芙蓉文集目録

巻之上

駿陽雪瓜園耳得撰
東都雪中庵葵太校

唐からー
 飲食歳
 茶店の詠
 跡あふ心
 暖歌あふ心

芭蕉
 去来
 沃店和尚
 許六
 耳得
 之圃

芙蓉

三

宗長店記

花供養

櫻動を

吾正秀文

恒の糸瓜

極乃多

麦搗うゝ

奥別田極うゝ

素堂

婆心

班象

芭蕉

如雷

路通

葵太

作者不名

遊来賦

圓の小刀

吾曲水文

蟬

火桶

垣の梅

葯蒔

瓜の一糸

周竹

蓮二坊

芭蕉

求光

園女

芭蕉

極境

其角



芙蓉文集上之卷

唐からー

義とちり奉唐かりーこちりー

ふせ紙

ふ紙おとふりうとんのあ〜くせと

去本

近日温枕の志わく不巻不極教日経る
けは好胡夕不足巻唐幸子と味満源
や一巻勢より〜人皮突花世ふ不幸と
ふ不列一遊と幸と幸のさるる
何とのらとん



三

飲食箴

澤庵禪師

飯と何の爲に喰ふ物うひふるまやめんだめふふふふ
ひふりたひちたふふて不入ふのよきふりさて作
まうはふまふまのたふくふ飯とくうまぬと皆人の
ふふふひつてふ備ふひふるまやめんだめふふふふ
はて喰ふ飯とあふは活物なうて飯の喰まぬハ
いふは飯の事とさふなり飢きふらふて一せとくふ
あふふあふ飢きふハそ何とおかふハ糟糠とせらぬ
食ふふは況飯とおかふとや何乃活まぬうふん

食食の服茶せよと佛もき教へ給ひ〜夜観又
ゆい人の夜食何乃三〜一ととふ〜むき
此心ありまふり我ハ三門の茶〜こ〜

雲茶店の銘

雲茶店共許六之門人治天
之別荘也故亦有は銘

許六

茶はめせ〜雲茶教茶法用は才〜めふ人
一盃飲んて此渴を淨め
二盃ハ眠と静
三〜酒乃酔を醒〜

口ツカガズリヨリ
ヌツのけれを念を想のかしら
六招七巻ハ腹りんと鳴くと天教のふ
ううハも声あめて社人身を教ふりそ
盧仝り七碗とふなり

所あぢい

耳埒

春なりく春の始乃春約より歌葉一酒を携
一日師の波たとおとろりて杖とすしゆを回す

春なりく山は春の春は春一川は春の春は
くく春なりく梅ハあひれとめこくく白
柳ハ通昭の志ら春とつなくくく後南の春は
いんかしたるいんかしたるいんかしたる
いんかしたるいんかしたるいんかしたる
蹄の牛は出さぬの初はくくくく
采舟馬ふら春遊小くく此情をとおひ出
たう然境に改とめくく市廓陽炎の煙と春
かかか被綿帽子の紅粉春嫁とのいんか
花はあさひき松のひすり花はあさひき

年暮しと古の妻といふくもあらしん只かゝるもの
 ずきの治まる代乃婆あしこも武城の清いとい
 するかくて一斤の風光斜る日影と誘ふて小社を
 清ハ石部の清くかゝし賊城山の雉子の声ハ拍と
 疑ふ臥し歌草の酒そんと飲する何彼と一掃と
 あらしん座をとるけとも来乃とあらしんあらし
 堂とあめてあふあらしんあらしん一歌草酒あま
 我腰回ととるあらし酒のあらしん地上ととるあ
 らしんと形とて風流と流く情と流くあらしんあ
 空ととるあらしの清いとあらし日ととるあらし月ハ

天柱山とかけと跡山のおよるあらしんあらしんあらしん
 詠燭阿川ととるあらしんあらしんあらしんあらしん
 年と歳と人甲ととるあらしんあらしんあらしんあらしん
 春と春と春ととるあらしんあらしんあらしんあらしん
 歌草の酒ととるあらしんあらしんあらしんあらしん

其引

葵太

香とけいといめらまはととの梅乃花
 落乃芽ととり守君あし下敷
 関札とあし初花此市はと
 されし甲はますと和涼あり
 耳得
 太

入月此子通^ウとそめり汐^ウより
一^ウ眼^ウ留^ウま^ウく^ウ霧^ウの^ウ私^ウさ^ウれ
蒲^ウ苗^ウ酒^ウの^ウ隣^ウ親^ウと^ウ乃^ウ挽^ウ埴^ウ利
祿^ウ直^ウて^ウた^ウい^ウ日^ウの^ウ借^ウも^ウ中^ウより
邊^ウ坂^ウも^ウ粟^ウ津^ウと^ウ降^ウて^ウ隆^ウき^ウ
志^ウん^ウこ^ウ淋^ウし^ウあ^ウや^ウめ^ウ志^ウり^ウ
足^ウ袋^ウん^ウり^ウぬ^ウ娘^ウの^ウま^ウと^ウ不^ウ高^ウり^ウ
惟^ウ光^ウり^ウか^ウこ^ウみ^ウ乃^ウお^ウ談^ウ
萩^ウ瘦^ウく^ウ為^ウや^ウせ^ウと^ウまり^ウく^ウす
乞^ウん^ウも^ウな^ウり^ウめ^ウに^ウ新^ウ田^ウの^ウ月

太 得 太 得 太 得 太 得 太 得

+

此⁺角⁺力⁺と⁺母⁺の⁺太⁺亮⁺と⁺か⁺こ⁺まり
夢⁺と⁺や⁺こ⁺ゆ⁺め⁺も⁺七⁺年⁺
世⁺中⁺の⁺花⁺と⁺猿⁺の⁺炭⁺た⁺り⁺
妻⁺ま⁺さ⁺と⁺ま⁺り⁺出⁺湯⁺泉⁺乃⁺つ⁺ま⁺く⁺
室⁺引⁺こ⁺と⁺まり⁺大⁺工⁺の⁺仇⁺と⁺詠⁺
い⁺り⁺も⁺三⁺十⁺八⁺と⁺居⁺ち⁺り⁺
清⁺香⁺ち⁺り⁺嵐⁺と⁺鈴⁺馬⁺も⁺歌⁺と⁺ま⁺き⁺
蕭⁺不⁺ろ⁺く⁺と⁺唐⁺の⁺夕⁺夕⁺れ⁺
大⁺名⁺と⁺阿⁺日⁺ハ⁺侍⁺し⁺粟⁺乃⁺飯⁺
飛⁺ち⁺ぬ⁺工⁺夫⁺と⁺祖⁺父⁺の⁺説⁺法⁺

太 得 太 得 太 得 太 得 太 得 太 得

144/101

五

ちくして氷室極北苔がう
板屋を飯乃皇居荒きり
掛乞も雪後の白雲をかんそり
晴くく融年傘てあし
あつり三ツツ北もいさよふ月の原
後す竹の喜も来るる
草鞋もあぶる庵下瓦あへ
旅にあうみのふしい甲も
窓くくこふおく空乃朝こり
栄けあて来る牛の風流

太 得 太 得 太 得 太 得

ナウ

葉中て安初山陰の花す杖
房忌すしひる寸莖 草

得 草

其川

春ふゆや梅の朝日乃長樂ち
風すこの影けて善つ梅れふ
梅々多やあふれりる花の色
送りの園一むきや梅乃るれ
影あて書院もきく梅れは
梅の教あふりや炭乃のた
竹をく善くハ梅北朝日式

山只
可因
二日坊
既白
大賦
也
信史

芙蓉上

六

意宗や梅さく門のさうとや
 梅うれ神こけひしや奇美流
 文もふと枕をとをり梅乃花
 家ひと川市こま川ちり柳
 面風こまゆきて柱の柳うか
 之澆尺く髪ゆふ乳河柳
 滝こ入女てはちき柳うれ
 うくひすや墨を硯こままり
 常や啼く柳もくこりさ
 うくひすやあはに十日のあ乃存

東武 友路
牛東
求光
蓼太
波
扇
松
如之
芋魁
風路

うくひすや墨を硯こままり
 常の啼くこをふて隠さるり
 二帝嘆梅は室より眺月
 うくひすは月も啼えけおろろ
 下茶こ露を並初ておほる月
 白奠こ一草と白ふや杖の筈
 紫まて志紅く梅のこくはるり
 濡歩り猫こ一子く心蛙水
 みより子のこちく向ても恵方水

東武 匣中
蓼太
耳埒
和堂
上総 吏仙
後碓田 千布
東武 吏流
 如雷
 雷堂

晴家阿ふひ

三圃

小倉の山陰にやうふ(きん)ありて二三日右ける時
なうううううううううううううううううううううううう
又よーありけし語き右ける人乃きさうあうん
めくばううううううううううううううううううううううう
いあうんうううううううううううううううううううううう
世をあらわすううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううううう

山はよら物のみひはさうううううううううう

世のううううううううううううううううううううううう

山里うううう世いとうんあとううう

ううううううううううううううううううううううう

とらふとあまはうううううううううううううううううううう
秋の夕々しきうううううううううううううううううううう
後りあひてううううううの山はうううううううううううう
紅葉とううううの志ううううううううううううううううう
光あひて血佛のあうううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううううううう

始に莊老の乃をまふら行しつ夜を脱ぐて親門に
入るかく志のつちるを海おかくく廣き世に名を以
てしせりともなり母のこころれ志とちる人よやとを
おとせしくおもひて帰るさう

かーうきや悲情と及ぶうえその本

まを中い磯縁の山々の細るをめぐりてむら
から竹の戸口かすめりるおありいさゆりちる
すあるとんくそ毒の者人をそむまへ入くさうも
ちく東の涼田のあせはひとけいあ垣のまつら
りるおありは家乃おくふり記志うも常にむら

ちうきうるたまとおほくさう残りちくくさうり
なうたみ紙形とうけく糸の香炉とまんとさ
遠柳の香紙のなすむかきさうの並くちいさ記
ゆらこあしけいさうあり書院のさきうけ草のまむ
極やせ庭とかきのもくやりはし南の障子月待
りかにひらたさる廣きおろ右ける女らちをく
人さおおもくまは卒の福三十をうらよんくう白
ちうらうらるおまき又うへくさうらひて髪のはやく
うららるかしのまりにくらくとあむまかまは
いとむらうけくちうけやりあすくくさうくまを

碓氷とき紙とちりりたまはるけりたてあまごりり
うぬいよりいづねのゆとも見はれしと引捨せらる
ふつふおくる字とおほいふまづつうひの字は
ちろりばといたむめりおくる引さけてかけらぬ
争ちる一ちろりくまごりめり物素一ちりり
幸てあて引むきひ又第ふまづつうあつとせらる
とそはとのちろりまづつうのさるく見ごとく款
た役の教うつとるまづつうあて肩とひらめゆひを
はことしとて又第ふまづつう捨とけりしめれらる
近くありちろりまづつう紙とちりりけなる

血とりしひとりふさふさいしちろりまづつうあてり
を極くちろりまづつうあてりちろりまづつうあてり
戸つせゆりぬ用ちろりまづつう紙とちりりあつとせらる
またちろりいづねのゆとも見はれしと引捨せらる
いまちろりけりしをとおほいふまづつうあてり
まづつうあてりまづつうあてりまづつうあてり
ちろりまづつうあてりまづつうあてり二人乃ちろりまづつ
くつせえ物然りちろりまづつうあてりまづつうあてり
いとちろりけりしをちろりまづつうあてりまづつうあてり
ちろりまづつうあてり

さしつ小のいともまふねのまをれは
 あいまたあ〜〜さふ乃々〜とせ
 とうさひらり何とそ声は抑〜びう度ハ人をもさす
 なるいっもしく声とあけ〜ひとゆ〜きん〜
 信〜き〜れは

ひとあねら〜る〜まれとありはさの
 口うまのち〜さ成もはあ〜とせや
 あ〜とせとは〜る声乃うす〜

とやひ〜うのう〜ふ〜おの〜さり〜り
 負〜け〜る人〜ら〜せれ〜ぬ〜と出〜る〜り

彼小予故志や〜せん〜念〜けん〜た〜う〜ま〜ハ
 さ〜く〜り〜け〜き〜せめて〜んのか〜ら〜と〜せ
 迎〜り〜さ〜ゆ〜り〜と〜お〜り〜と〜是〜と〜た〜ら〜め〜
 な〜く〜ゆ〜わ〜ら〜い〜ま〜う〜と〜ひ〜と〜そ〜ぬ〜お〜ひ〜人
 又出〜さ〜あ〜い〜と〜と〜物〜と〜と〜は〜る〜紙〜と〜
 ぬ〜り〜け〜た〜後〜の〜考〜ら〜拂〜か〜と〜る〜ハ〜ま〜ら〜と〜こ
 け〜り〜と〜る〜ま〜や〜う〜く〜ん〜ま〜ん〜と〜と〜り〜ま〜〜れ〜ハ
 ち〜ろ〜び〜え〜と〜あ〜ま〜い〜む〜ら〜の〜あ〜あ〜ら〜う〜と〜け〜ら〜と〜
 か〜い〜ら〜れ〜ハ〜人〜あ〜ま〜い〜ら〜〜と〜ける中〜小〜家〜物〜の〜戸
 柄〜あ〜け〜と〜繁〜と〜ら〜なるお〜と〜思〜ふ〜ら〜あ〜け〜る

秋の夕暮るはさき海をさして入まれば人
波もさく尺何ゆへなまこころもさるるも
あまの忘るるはさき海の中さきまけり年を
さるる人こころのけりけるなまこころ

目にはみえておらまぬ秋の紅葉は

又

さきもあまのさきもさきもさきもさきも
流のさきもあまのさきもさきもさきも

其川

西ののりとも秋のけりけりけり	吐月
朝のけりけりけりけりけり	物言
秋のけりけりけりけりけり	自来
秋のけりけりけりけりけり	桃鏡
秋のけりけりけりけりけり	慎車
秋のけりけりけりけりけり	鬼守
秋のけりけりけりけりけり	和星
秋のけりけりけりけりけり	彭壽
秋のけりけりけりけりけり	真波

東武

墨及ハ四ノウノナリ大文字
 際分ノミク尾花と出テり梅ノウラ
 平外ノ苗トノミ子也也水
 垣草此露見ト来ませそけ飯
 を里乃初テ出来て磁ノ乳
 横ノ系牛ト夕鳥の花即ト
 枝打戸のひとり四ノウト秋
 娘去テ子ノ信トヤ菌特
 給法戸ト見テる神乃費ト
 一ノいの秋とすリり響む

系 山只
 丹丘 交来
 後久能 蕪戸
 栢山 白鶴
 後府 蕪珠

驚ノク初日のツレ驚ノカ
 草特ヤ之埃ノウリ呼子也
 詩トけくる妻持テり棠の花
 葛也
 耳得
 周竹

嶋田宗長店記 山素堂

仲秋十二嶋田の歌ノイハる日ノまじりて
 あり初ノ大舟川ノ水トさテて
 旅痛を治スルノ宗長其土ハけ御より出テ
 あり又條義助トシテる派士ノ祖族トリト

母やん散る氏やうりり偶如舟を人かへらぬ昔を
慕ひひく一葉扇と志月らふ名は事くも長体と
号し故蹟とやうして往來の強客とてむ志うハ
あまそと系子強きりうはあつたを風姿以志乃ひ
よまふとのハ親れとてく子の子やくま

ゆうとあれ牛と牛つま秋のくま

舟扇何うのあ三子この記と乞求て一袖と
巻敷して志うくもせとをふたに予ひりうに
ありとたとうやうなる流石とひろき難波江の
うともあしとつあしと事やうぬ只祇長れ

風雅と往ある事以感して涙と落を乃

朝芳や嘘物寐とて葉の扇

うと文とむうとうとてあふ草

花供養小席 波安心

る風あふたうくゆく一花もくや敷る
薫りいとあけう根とくもむとくはゆと又
来る春のこもる母とれとを供養せうの
風雅乃か意うはあうと其文曰

春來り去去く翠翹金雀の粧ひもあうの山

山嵐の暮と暮と見えぬを浮りたりと記さるるもの
帆あけたり舟人乃より春夏秋冬と舟人老
いひしも安んずる事や付ていづれお屋より出る
草木虫鳥悉皆成仏と阿まを必経ふ不なく
佛果の御進音ハ極深潔として教啓を勅せし
今ハ地ノ底へ声なりと云ふころへりいづれゆめ
莫草ころららの尖ちる位の世なるう得く喜に
あささるる心りくふりしるが白子ハ彼岸におふ
るふ忘るるくをわらさるは香煙なりとて春日也の
をゆり歎乃侍と云ふハ誦經の声なりとては

百子のもれ晴とまほふ阿のハ阿彌陀ふくと唱く
生れたる仏乃面白くびきと心祇園の豆腐のこま
なうねとほくくーの心して黄深もん乃風船の
あさり二途の川と二階越とも遠の庵とん氣遠の
あるゆ一せ花れ一盃ほ世の一滴何ぞと云ふらん
さうハ仏果の産と聲と聲と云ふらん乃初瀬と歌
け新仇もと云くまも然と破まけとて芳跡の
山のまうまを識之法のまとい勢なり法や志望れ
山廻るる人ハ下園のいとくさるる鼻はまきん
おるゆりなりまはまきまるる吹のむりや云くしん

かの名うし柳ふ路菴の湖と波の板すうう声ええ
 る向と風の強しううこれや山水村里もせ旅の勢り
 海かうこれハ程もさうくをあらふりり天地ハかま
 友やうかまはた天化となうて日影乃とやうに
 けし方暖くハ後一ふの梢こやうり表のその淋
 夕暮や柳り安とちと眠まり又ハ旅の暮衣脱
 着ちて粉こけく風風の車と古き如し御奉と
 ちこひ香炉筆とあうねと玉の差をとりけき樓
 通うしては客の心と傷しめあるハ秋書のい
 ちやあつと障ハ上跡ハ海子ううういハなを

ゆうに昔のり之師虎も伝やうんハ恨あうん
 是と望んう向は又後あり安ハしんは
 りと見ゆハ家たるの一枚もけしん何り迷ふ
 あう世一定とおひハ一定名定とおひ
 ある上人とはふやさうりうんこの世定
 物きふ付かあら迷ふハ世の中乃本情と定らぬ
 極樂なるんうれあうりこ定と定は佛
 ちうハいりてり迷ふりあうん
 必佛果の基と定は悟故十方空

梯劫進

班象

園女と伊摺の産子して漢萩乃上風と秋情と
悲し中比ハ難波の伝く妻をこの梅を望み
かす中程無所位のおきひやまひむさし月影
をうまの旅くまを宝晋舟の杖をさうめり

霜やけも弟二の光の心やう 園女

あややちや乃茶とふとふ 其角

けあら師ハ菊の葉とくも冊工んくりかく
身坊と無善乃地りして市声とのさばり

とく川風さむい西笑をよりの鳥の祢く
和のふき下火桶ひとらぬをちや家乃
ゆりみあまは小町うたは似るくや
つきくの法師の花は葉綴ける昔も
眼科と怪の産子してあやうも
そらく平よかしのやまは
園女さうと世ハ風流はさまりまう
嵐さつと家去る自打もの今ハ一本
あやあかしのを誂すされと班象
是と極進まんはるく

ちやうくしんをうけしうとて流るるを古の流るるに
 穂葉の露草の整地はなしく一椀一本を白一章
 如部のはた乃法樂と乞と先て漸林葉のそと
 起すれ百年のほろかからん際と女て千はれ
 盛るるをぬい一眠をくこゝろた乃はくし一の
 神氣小再深しく秋葉まをせれ下迄くわける
 筆ははらめてるを勅進の額と速おらんぬ

榎樹を靈社之右今僅存一兩株

其引

志るまやちる時たれう一乃山 葵太
 乃く世をたて一日や草也山 カ、尼 素園
 而のうれりのまをまへいおるひり 後府 金急
 じりるやたちいより教訓也 东武 眠象
 世と捨る山位とるささうりり カ、 因文
 ころころと人善うぬる椀う船 村山女 仙衣
 教へてを風とたあま夕はら 东武 睡面
 春も又隈るはまのや山ささ 若奴
 油所してはかくさゆ椀う 若古

象印と水標とをわけて書しり
 夜さらさらや益め八毫の項と
 嘆てうらむ情をなりうと 初標
 うらむ心だいのりまき啼う教さる
 法興津 暖山
 火と信りこ里ハ辰と山はらら
 耳得

正秀香文

とせ紙

此芳林厚深く海大波の出を母程のうらむ心
 此香ののりまき啼う教さる
 法興津 暖山
 火と信りこ里ハ辰と山はらら
 耳得

一 此別江戸を三つを分けて書しり情とて入る別
 一 安堵よりうらむ難と
 一 一仙とて感嘆の心かたきとて福とて書大功の
 風報等入りし別を事記かたきとて書えとて
 一 日名方一此日とて下法茶一袋とて一後とて
 一 毎く糸の厚志記とて茶抄とて書記とて

一 粟津草庵より久しからば切の玉糸もなしく丸角
掛ふ浮草を無風の境界と申すれは深泊いし
ゆるりついで叶ひし根よりわたりてわたりて
はふり進心をなほしこころのゆりあつた
所指きて糸と志つてくそのまゝのわたり物珠の
あこの風乃ちとぬくは是結露も露をらに下さ
そふれんこ中もそくくハおまうせん

一 風雅は比叢と思ふゆゑにむさくそとさむ
丸信の人さくそをあらひひとの城陸分り信り出
てふれ及肩むちを辰の信をうたひて信信及れ

何角丸をうり目とく子を中中詩一ゆと

二ノリ十九日

芭蕉

西秀雅文

昌房探子あまへつわてうたのま中の中を
り進信の信くハ世とまきくハ中中中中
難忘ゆと

垣の糸瓜 一黙如雷

空くきり山下に一葉庵とむまくと垣

由ふ蔓あり潮を驚く淋くさるるは
 かりぬ秋をふかお訪ふ人の西目法作あり
 或日去の蔓とさびりて日暮くさく一般美の
 ありくまことしる人乃ゆ一葉のやぐさひらる
 法を正しと称もおけまは担くさまをち一花と
 合れ委えちり月を八粒盛の水と朱く愛人れ
 鏡屋小移り老く筋骨の奴と成て垂氣れはめ
 流寐しるも竹婦人の癖はとなく或は湯飯に
 座く課のあうと成揺ても狐又か〜欲や
 一とハ糸瓜の皮乃きん袋

楳のる

塚本如舟住于駿及
 嶋田駅其風騒相續
 到于玄孫今呼楳舟

路通

如舟とる名らさばおれりるあはれ美り〜程と也
 西東ゆさふ人の中〜固ま〜志る〜さ〜た〜ん〜て
 大井川〜さ〜ゆ〜ひ〜きる水れ〜へ〜も〜お〜ひ〜き〜り〜か〜ら〜る〜と
 身乃るを成〜と〜ふ〜せ〜と〜み〜ひ〜り〜と〜い〜ん〜も〜便〜お〜ま〜に
 何〜守〜能〜諾〜の〜う〜ん〜時〜乃〜と〜て〜奥〜を〜ま〜り〜〜と〜あ〜は
 どのあま〜は〜ま〜ふ〜ぬ〜と〜ハ〜ち〜く〜て〜お〜く〜は〜あ〜や〜さ〜と〜又〜あ〜ひ
 ころ〜し〜し〜く〜遊〜ぶ〜路〜事〜と〜悦〜ぶ〜一〜む〜し〜〜記〜下〜と〜は〜い〜か〜ら
 比〜る〜り〜契〜く〜事〜れ〜ま〜ら〜ら〜れ〜心〜休〜め〜ふ〜と〜ま〜れ〜〜と〜〜と〜

中比芭蕉庵の翁もいさる人こそよきいさくをみん
 雲ひ愛白くまをさうはけし終ふとけりも今ハ
 夢の世とわりまおの友そらに如竹やしくなる好人も
 むくの年の冬うまうきさよせぬおよん世世十とせ
 らうりハあゝの玉こそく久しありこそはり来こそんや
 事らうにまりおうりおる事のもてあ人もぬをくたう
 いさけよまいらうたけらう徳田の井の陸もせえんこ
 かこまり飛出くもさほありものいさぬ根のた盛
 なうく昔そくくあうちうくく日志まゆとよふたけ
 十年と誇りくひをやとくお由 路通

妻搦う

薔木

男はてゝまの裾みしう女はぬ拭く臥色む
 ちと株とくろるその推乃て鄂ひらる声うらあけ
 うきふとく留弁と日

君らとてまの麻の糸おのひ合をて結えり也
 君ハ涼せくさく寸夫ハまれとも目とるね
 了ふひ之際ノ橋ノ寐くはさびさうわく川ぬく
 けまやは又ハ男女の中を知りけ又ハ多枕の
 情とつくさくも梳ハ風ね乃やほまきうて恋は

天乃うきうに二種をせけひあれうきうに一の
二白一黒の穀り八雲を出入る八を垣むむひ初て
鶴とくうらうらうてんてん乃ふ大和の紫乃蝶とけ
ちとせりうり今げ鶴れうふ西のつきの内とれ
他このうの家とちう守かまて志うく只気ふり
むうんをん秋の菊白河の関勢うくそ風流乃
うく光年奥れ田うへ唄と乃うくうくうく
あのをうりて通ひ舟とようらとうくうく短報と
文一侍りぬ

麦又章

其 一

麦粒や深地のおくく白お吉

其 二

麦つぎやはあぐくまけりハ表向

其 三

むまはるや尻とちうけて遊童

其 四

乞食せん世はあたふ不裸麦

其 又

麦阿ふや泣くく苗不歌る

其川

二乃声白里乃之なり不そ^{東武} 金沙子
曉之乃ぬ月とあり^{東武} 時多 這平
川喜は^{東武} 消^{東武} 息^{東武} ほど^{東武} ます 雷堂
その火の花^{東武} 嘘^{東武} ち^{東武} ー 郭公 求光
ふふ啼く^{東武} 聖^{東武} れ^{東武} あ^{東武} て^{東武} け^{東武} ー 子規 ^{大正} 梅富
捨て^{東武} あり^{東武} 皆^{東武} も^{東武} ち^{東武} ー や^{東武} かん^{東武} こ^{東武} 多^{東武} 水戸之六
枯^{東武} 木^{東武} を^{東武} 披^{東武} ー して^{東武} 鳴^{東武} や^{東武} かん^{東武} こと^{東武} 多^{東武} ^{東武} 牛^{東武} 東
眼鏡と^{東武} 進^{東武} へ^{東武} 耳^{東武} 正^{東武} ぬ^{東武} こ^{東武} かん^{東武} と^{東武} 多^{東武} 人た

全

抱い^{東武} てる^{東武} 藝^{東武} ころ^{東武} 光^{東武} くり^{東武} 白牡丹 ^{東武} 婆心^{東武}
後十日切^{東武} くる^{東武} やり^{東武} ー 心^{東武} 牡丹^{東武} ー 如^{東武} スン 左更
夜^{東武} 猫^{東武} も^{東武} 一^{東武} 声^{東武} 眠^{東武} る^{東武} 不^{東武} かん^{東武} こと^{東武} 多^{東武} ^{仙臺} 習^{東武} 祈
菜^{東武} 花^{東武} 乃^{東武} と^{東武} 蝶^{東武} の^{東武} 志^{東武} 多^{東武} ほど^{東武} かん^{東武} こと^{東武} 多^{東武} ^{上総} 砂^{東武} 川
人^{東武} ち^{東武} ぬ^{東武} 露^{東武} と^{東武} け^{東武} ー 心^{東武} 牡丹^{東武} 代 ^{小田原} 麦^{東武} 由
芍^{東武} 薬^{東武} や^{東武} 女^{東武} 房^{東武} 女^{東武} 介^{東武} の^{東武} かく^{東武} 進^{東武} 里 ^{東武} 蓼^{東武} 且
朝^{東武} 起^{東武} と^{東武} 起^{東武} くる^{東武} 夢^{東武} や^{東武} かく^{東武} 進^{東武} 里 ^{東武} 自^{東武} 来
花^{東武} くれ^{東武} くる^{東武} 夢^{東武} 心^{東武} 又^{東武} あり^{東武} くり^{東武} ます^{東武} こと^{東武} 多^{東武} ^{上総} 津^{東武} 風
一日乃^{東武} 榮^{東武} 白^{東武} きの^{東武} の^{東武} ー 八^{東武} 希^{東武} ー の^{東武} ころ^{東武} 如 ^{仙臺} 丈^{東武} 芝
教^{東武} 芥^{東武} 子の^{東武} 志^{東武} くる^{東武} 白^{東武} 髪^{東武} を^{東武} 狐^{東武} よ^{東武} こと^{東武} 多^{東武} ^京 山^{東武} 只

ひら〜時あふふいよのやあーの花 大耳
 咲りり〜け〜乃む七日 湖喜
 夕〜まは結〜から〜り芥子のむ 女 翠紅
 百人〜や縁〜斤輪の糸車、菊之
 交ひ〜の〜ら〜方水鶴水 花舟
 惟子〜夕書〜めん紅乃られ 女 扇籠
 艱〜ゆ〜ゆや美紫のさ〜網 耳得
 壁〜草の乃つま〜りて 蝸牛 尾城 本兒
 岩友や花ときれ〜る若乃花 東武 枝玉子

奥列田植〜

延十夜口上

唄ノ名ナリ 作者不知

阿まハ大きんふの古田植〜うまは〜うま〜ぬうたあ
 次節から守乃八曲も〜む〜むい〜り〜む〜り記
 大〜ろ〜く〜れ〜れ〜ら上の町乃〜三〜は〜は〜り〜り
 引〜ん〜く〜り〜〜と〜か〜く〜ら〜い〜や

苗ぬ

多〜福ハ千石おろ〜や〜う〜と〜れ〜り〜葉〜ひろ〜く〜や〜り〜せ
 お〜り〜や〜ま〜や〜皆〜と〜〜ち〜ん〜く〜葉〜廣〜子〜こ〜せ〜苗〜乃
 中〜の〜草〜は〜世〜と〜を〜何〜と〜さ〜ん〜は〜ら〜花〜孫〜こ〜う〜と〜ん〜て
 右〜く〜海〜と〜さ〜ん〜は〜ら

養正社

正正

知んり

軽んり好つふふはし生ふ松や何松白紙の紙子
捲テし田といふふ蒸ねしちちの一の枝と云ふ
驚り菓をとりて菓乃ちちと入てこれのち合
九ツ一ツと字賀しませハツく世若といふま
りこれ田人の田に取れたこの田七から七からに
八うら申してさうは世若くもまをぬい梓う十
女う二十人二十人のち中てはこれ目には人
切の糸とれとあけたまし目と附く旅人

軽極く出るゆゑに契して一と二とふと
ふと二節二節かと極くも判りてふと

魚上り

日取られし魚乃ち成と魚力くさられおとさ
魚力くはいてさかっ枝と何具さうへへ百之具掛へ
白紙のおとのうへへ百之具掛へへ魚力くはいて
うへへお汁系小何くいさや日つめかやあけて鰯と
ま福ふ思う

奥列るてカオコト似て思ふ魚とウロカラとふ

曲

強金へ登るるなれとふふと似る石あり男よりて
ふふふかうれはなよまうする石あり強金の御所は

屋形ハ二階造りの八棟正祿二棟正徳と云せ
二階造り此八棟かまらるの所所の屋形の百千本の
竹の子百本本らるる所所ハ名取と云ふ

夕暮

夕暮まに出さるれと糸田とせうとあくせうとありハ
おうりやまや百や古解人百在余人のも中てハこれ
しあこの年辰紅のしらまきした瀬り年辰

上戸とんり

上りえりのあんなあはれもあんでうかけおが玉れ
みうしてむらやうききもあんでふうけるなまの

上りおらうりおいとゆりう田の神

あんでとらまのふくしりふとらまの

秋仙

風流のうとや奥乃田うへ唄

扇

益あう川の冥一反 瘦

耳得

漸解とあらわ秋の葉うへ

盈行

寐てあら猫忠尾と軽たよた

合巻

月うへと家ささ乃うひのり

葵を

しらく 嘆とくまを秋ゆ

湊山

司石算加ふおとひくあり
 隠居支那の目鏡 紛新
 周竹
 房崎の梅乃々くは物好
 梅
 香阿たうり年とも
 子味香の蒲志と物好
 志
 あしうとくのと 志ぬ免と
 志
 鶴北水ハ鳥羽玉乃 若なる
 山
 月と打く綿の初志
 古
 まうと書納乃 撫成布
 古
 あまりくやびの髪と
 古

西下や眠る花は
 行
 破業とさうく 汐 志
 志
 陽を北古い毎日ハとそれ
 志
 切くは免と 質と 跡志
 山
 小鼓と香文と 花の中 暖屋
 古
 出 穂と 通く 志
 行
 只ちくぬれと 本履と 志
 志
 瘡痕と 志
 志
 去形くくとの白例も 志
 志
 諸行を常れ 志
 志

吹おろそ枝の音く 雲乃峯
 山 古 山 古 山
 神酒佳利月君なりと 八五三三の如
 山 西 天 行 山 古 山
 い川くそ日く 砥と中りて
 山 西 天 行 山 古 山
 群猿とあやう 此書妻もあはれとく
 山 西 天 行 山 古 山
 飛脚小娘乃介とほふやく
 山 西 天 行 山 古 山
 乃ほくはるたさい 宛の海くさく
 山 西 天 行 山 古 山
 西行くく 風の春平
 山 西 天 行 山 古 山
 くのたの蝶く 妙とくれ 鶴と知事
 山 西 天 行 山 古 山
 松く白山も言ふらふ 時
 山 西 天 行 山 古 山

其川

松く月然うさひ出く くら田植ハ
 山 西 天 行 山 古 山
 くら川くこれ表く物くら田くく 船
 山 西 天 行 山 古 山
 樹く表の田くまきくさく 友の月
 山 西 天 行 山 古 山
 妻くく表とらとらへく 田植ハ
 山 西 天 行 山 古 山
 さくくはや柳もきくぬ 湯 仏
 山 西 天 行 山 古 山
 梅乃融のさく 庚くや又月多
 山 西 天 行 山 古 山
 又月多や川まく 草芥く花もあふ
 山 西 天 行 山 古 山
 景陽也や日初さくめ 色ハ何
 山 西 天 行 山 古 山
 美くくまきく ぬくちりくら 雲くれ
 山 西 天 行 山 古 山

雲深乃袖了 澹く不^{東武}りり如 南苑
 能因の堂はかくまて 華うか 葵太
 去^{白牛}くまる虎のふりく 螢 沢
 浮草や折く 風く花の淡 吐月

潮来賦

兼路店周竹

水上楼あり 潮来と呼ぶ 香五の表をうく
 又迎かすうしろの 稻荷山の列樹と帯 菊
 賈^賈の洲の眺をあり 友に十二乃板橋をかけた

い^いや^やあ^あき^き人の水^水さ^さの^の記^記れ^れく^く終^終く^く考^考れ^れの
 浦と^と呼^呼り^りと^とな^なん^ん空^空あり^り如^如東^東に^に廉^廉の^の社^社を
 妾^妾記^記あり^りて^ての^の老^老蔭^蔭帯^帯乃^乃り^りふ^ふさ^さ蝶^蝶して^てや^や
 仇^仇波^波あ^あり^りハ^ハ帯^帯る^る一^一夜^夜の^の紅^紅因^因と^と百^百年^年乃^乃齡^齡と^と也^也
 友^友ハ^ハ私^私さ^さら^らあり^り音^音より^り書^書津^津と^と天^天く^く煙^煙く^くや^や
 就^就田^田の^の二^二季^季と^とあ^あり^りち^ちひ^ひ月^月く^くの^の縁^縁眉^眉と^と彩^彩る
 絵^絵と^とさ^さの^の滝^滝と^とな^なり^りと^と波^波の^のう^うれ^れ鼓^鼓と^と合^合め^めや^やさ^さん
 岸^岸ハ^ハ情^情と^と合^合て^て一^一斤^斤の^の釣^釣を^をた^たく^く寸^寸季^季既^既ハ^ハ綿^綿纏^纏の
 あ^あら^らひ^ひと^と得^得え^え兼^兼ハ^ハ中^中毒^毒と^とひ^ひと^とく^くを^を解^解糸^糸ハ^ハ洛^洛と
 似^似たり^り奠^奠ひ^ひと^とく^く禦^禦あり^り乾^乾坤^坤日^日和^和く^く少^少多^多ウ^ウ里^里人^人絲^絲
 小舟

と浮へ一夢の權祢言ふたかひくちりや秋風を伝へ
房のよきふけはいつたおりのみ持てあめりき
探干くまきくしくそ空と詠りも実かたらはくま
膝首あはあしくあふまぬ波山の志はくま
青樓とぬめくしくけ地をわめく先帝をとる乃

関の小刀

源太郎若義濃国関駈之
産也俳名曰秀橋今住于
東武曾与蕤太友善

蓮二房

源を帯ハ少年なりくまき二ヶ歌を
らんそくあはれと

関乃小刀ハ刃を細くし瓜もむき月を記と

其川

癖小舟は魚床是く母ま素瓜 東武 白牛
神聖舎や書てハ瓜乃山いりり 真波

虫丸窟

若き虫丸琥珀の瓜若きとせり 蕤太
むらきくハ花と庚夕や素素瓜 名門 花上
夕風若中り亦乃きくこり 出羽 杜考
きくくさやまき少おふ松乃歌 越中 李史
うりくとまの関ち涼う 東武 嵐腹

すくしとや晒乃川れ夜の喜 スニ女 菊契
 世の夢れかす祓くや夕とみ、菊胆
 風葉やましくさけよと挽る印と スニ 昔我
 押出して裾と波あり雲の峯 耳切
 松風とらちうにちきて雲のう縁 丹左 扇中

曲水答文

とせ紙

あやうよりと悪妻を鏡に照らすえりやの秋
 世喜向ふ赤封紙く心地く相見はら望園に

うたけ方子翁目もなまむ竹助後出さるるまの
 少状もあはれ下と出ぬ人より目くは乃りて
 まなむ山菜且三ツ物のすハ人書く具とて
 五向古感のく一珠頑より告下年くハははを
 心より子斗とて捨くへもそとや乞と菜且れ
 名残もやと存らる少ハ情と出くハ処の年と
 ありとハ甲斐ある地とて悦とけく
 一幻住居上毒と信すまに珠をなうと世の何れ
 少とをさハは山のく折くの痛足張志我余と
 かくしとてくハは山言の暖とてうけ

一 凡雅く及節又く世と之をくおんくはとれり
 空を夜とて一 務負はりしひるをたふし
 走りてものあり彼木肌物のうらたしもの
 中らたれ忠告の妻子扱とさく一 店との合意と
 娘一とハひつりきんた増りたり一 又と
 富きけし目と之懸ハ世とを将人子いんは
 志うと日暮二世三世忠告の務らものやうす
 かけらるものも志わくし一 此いさよ一 出たて
 ぞとくしと縁者みらの向くエ吏とめら一 事終て
 所兵かと真さるるゆも備く少年のよこるる

ひと一 されも料理と調へ酒と飽さし一 貪める
 之のたとえけ忠告以肥しひらりきさあしんたれ
 速立乃一 節なるし又志とはと忠告とちくさめ
 ちがうしとを派とさくはちさるり実のたつ入
 るらと悉ありちと遠く定家の骨とさくし西の
 い節とたより樂天の腸とちくハ杜子う方寸一 入
 やからさくしと節部りちく十ヲの指ふさく
 則け十ヲの指さるる一 能くははし一 此節は
 心をよむ

一 海海りハ大坂とて遠信致らるるの批帯致らるる志

三年のあよりんぞ東よりみくもくは教ふたはくすト
もくも西の能周りやん神はあまうらへん年世の人より
りたん常の人をたふとちをたに何の事あつてま
うたやたあかたは不返はすくは倍ふて年大風浪の
たふけふあはまはむくうのを念より坊でて中ぬ

曲 水後

くせん紙

奥書

東花城

け書ハえ祿のくしめ壬申の年々癸酉の年々ん

壬申年旦

人とらぬ春や遠れうくの梅

癸酉の年旦

年くや猿く忌せくる猿の面

坊かりてくけ終りぬ壬申の年旦こはんこ系椀の
款はありく武の保川こあふ紙かくせくやあうぬ
半面く名流乃詞あふく甲安あるん比やとすふ
乞ハ変て遠の梅ちるく

蟬とすたりふまこ述

紙

求光

蟬こふれふら塵塚の苔くうこれ何とをさの

何とぞ名も守り多ふはま紫もあまの流りて野も閑居と
捨てきりまらぬりそ人呼く蟬守りも音の仙と
かよふところやちれぬはまの貴なりとまの蟬丸れ
伴風とつて人風と吸露と飲く後平の春とあ
かこゝと呪とそりて痛ひはれぬはまを乃まともうぬ
は栖ありて或ハ脚守の障り雪とさ人或ハ山田乃
唄の役目と補み歌ふ時女法と念の奥とまあして
淋りやうくこち守りあしたとい事予のまの坊ありとも
よく政陽とる情りお記とれりう蟬蛸の音も
きくはに蜂養の計とりて守りぬおひりて空蟬と

御まをたふよりあまの螢のまれよとほくあり眼を
寐姫の夜に輝く姿と昼工のまの飾りも折られたれ
風流をうしなまいとわうくとあまねく色国秀の
少人あまはみんとさるる唇をうし又月以ありてに
松泣ひてふとのまてふさうくもおとろふて却て
悲し果らまのまのまお家と隣と座め風流のかつらと
長和とまのりかえりて若しひとり汝らこそと蟬と
出ろあま所廣し舞洛と立ては蟬折るとい陰海小
深ては蟬録とい蟬ははむ吉の神凡の働蟬流とハ
白をを浸して例のま泊り乃物敷をあらさ守

春秋とあはれはともきりぬしりく 寿矢の沙汰ハ
 右にこそあまをせすといふく 愛を申し せ経ら物不
 あらにけし心とまとう 我こそすも一樹の陰に
 廟を志す一河のなりき口とまき酒れさゆりも
 こそそれ日の傾くとあらぬ志りくの 標えは乃ふ
 必懸た祈りしりく かくて目のふやとるけし 女も懐れ
 かけ細くた下の 徳ときらふ事なりき

蝉と蟬林とひ乃木と花れ宿

火桶

園女

秋は秋とまらむと冬と見さるめてやこそしくと
 反右より出る火桶ひしけとらぬまよりけ 是を
 何の翁る後成秋政をたふふもあら守共この
 ひとせこそ秋冬とまらむとあり春よりけ けし
 いふとあはれあはれまらむとまらむとあはれまらむと
 としとらむとあはれまらむと

藤とあまの打妻の粉と一葉の粉

垣の梅

とせび

ある人の事此戸とあるゆゑにうづらふことよそよそ出ゆる
よふふくやうたるるおのこひとり留まるとまのり
右にまた垣の梅もいふゆゑなるそふそ
あつとつと隣り梅ありさぬふふこや
いふく真ふふ心地よくゆふんとせし

ふるに來て梅さへよそのかきゆふ

あんまや

極境

これ薬弱と菜類の一類としてその形ハ
芋魁何首烏とちうくゆふくつわ乃風情も
をくればやうて合浦の産と云泥こされと毒と
玉と呼ぶ何うに室圃と培ふともなげまは定て
山畑をくたせまらうやあつと高客はあふ
みくまふと成方ともありぬ一書曰氣味辛寒
毒あり延壽書くは瘵試うまふ人りとの合ふに
灸をせはぬとましく合ふて瘵瘵とんくりそ

今世中の茶區くんとくも依念といふ人やきく
父と梅花山吹と兼清寺ありて戸らやあまふ
此方うもめさゆきありて一津端山藤のめさつき
上小ららつけきう下にきりゆきうちく初春の
娘ふ門乃あ葉うは賣まけくはと一白ふりまねて
恨むくもあふさくもがー梅乃花をあまり
あ葉久涼のくち菊紅葉のちくくと世工捨やめ
そのくも又許き月を束つうて帘の下くめの記
庵幸子の又くうらまさら男も忽汗となりすと
おー或ハ胡椒の粉く鼻とくちを或と程汁と

化して舌敷とくくもるハ一除凡流の海法ありまのこ
な〜んちく〜んちく月まに侵され氷と愛〜んハ
野〜ぬ里とく〜んちく此法の場乃京物社壇瑞歌の
備をか〜んちく異〜んちくあ〜んちく〜ん茶涼茶後と
欠事稀なり佳者味味の菓子と不やしあまハ
とち中あり只新右の編く〜んちく豆腐のりあ
名と並んハ光とかくやくんとい〜んちく可〜んちく

瓜の一花

其角

河跡松波老人 茶對及公 一物之用乃蒸とく

あまのつと別長瀬翁のうそ狂る記あり時をまじりて
きり此かの体きききあやうてらんと世道翁さふ山
何う一言水さうきうれ訪ひゆるけりてさうきうて
凡月の定灯る乃麻上燈竹よりやうた後思く老飯
やうきあらし甲めつたおろく凡炉の解眼くさうたけ
祝くさうま日のけりひいと奥あり座のうらちと文後の
段巻と居てあるさ長敷のころきさうさ花巻よりそ
教くとあき世となく後とおひやうさきさあめめ
やうさうさうさの涼と味りふるんあきさうさうさ
きりた似乃花びりてけ敷くさうけりてさきさうり

花よもどれ蔓さうりあきとむきさうさ水さうさあれ
扇とさば序岳のあきさうさあきさうり桜西あ
うらあき風情といさう戸部敷の涼く尾とあき
亀乃けりさうさきり水声玉ちばさうさけり
夏と涼く老人の若話さうさうさ一月さうさ
時をまじりさうさ飛ちさうさあき定さうさあき
せぬとあきとさうさ今さうさ郭さうさあき
久さうさあきあきさうさあきさうさあきさうさ
肥さうさあきあきさうさあきさうさあきさうさ
あきさうさあきあき今さうさ二若さうさあき

芙蓉上

瓜のくちねいりかたを
瓜や絵とかきる器の
けたは紙あやまりて瓜
箱
言水
番子

先甲也家

しりねびり

鳳有高梧

田村氏

厚石氏
可紙



世書状何事もなきに
て

中書何事もなきに
て
先子の江守
と成るに

世書状何事もなきに

うし 何事もなきに

世書状何事もなきに

世書

世書

世書状
何事もなきに

